

## 14. 運命のトンネル

敦賀市立中央小学校

6年 金田 真奈



各務原市立中央小学校

6年 桑原 志帆 中藪 奨之助 野村 亜衣莉

中原 未裕 山口 智弘 浅野 未紀

塾の帰り道。七美はいつもの道を歩いていた。左手につけた腕時計を見ると、五時三十分をさしている。

「まだ五時半かぁ。今日は早く終わった」

そう思いながら歩いていくと、目の前に一匹の犬がいることに気がついた。犬を追いかけていくと、いつの間にか見たことのないトンネルの前に立っている。

「あれ、ここどこ？ 見たことないなぁ」

七美がきょろきょろ辺りを見回している間に、犬はさっさとトンネルの中に入っていく。

「えっ、ちょっと……待ってよお」

迷いながらも七美は中に入った。

夏なので外はまだ明るいのにトンネルの中は真っ暗。七美の足音だけがひびいて不気味だった。

しばらく歩くと、まるい光が見えてきた。

「出口だ！」

七美は足早にトンネルを出た。

そこは見たことのない世界。砂浜、たくさんの木、そして青い空が広がっていた。七美はまわりを見ながら、一歩、二歩と海の方へ向かった。

ふと前を見ると、さっきの犬と一人の女の子が座っていた。

「あっ、あの……その犬、君の？ ここは……どこ？」

七美が聞くと、女の子がこちらをぱっと見た。

「あなた、だあれ？」

「えっ……わたし、七美。東京から来たの」

「東京？ ここはドルフィンの国よ。わたしは留奈。この犬は美留久」

七美は、ドルフィンの国なんて知らないよと思いながら聞いていた。

「七美だっけ？ どうやって来たの？」

七美が一番気になっていたことを留奈は聞いてきた。

「それが、よく分からないの。トンネルに入ったらここに来ちゃって……」

七美は、今までのことを全部話した。

「へえ、不思議ね。まァ、しばらくここにいていいよ。うちにきたら？」

留奈は、優しく言った。

「そうだ。いい所に案内するよ。ついて来て」

七美は、留奈と美留久の後について行った。

しばらく歩くと、『海のトンネル』と書いた看板がたててあった。

「わたし、用事あるから、ここ見ててね。十分ぐらいだから。海の中見れるよ」

そう言い残してどこかへ行った。

残された七美と美留久は、留奈が帰ってくるまで海のトンネルにいることにした。

中に入ると、魚たちがたくさん泳いでいてきれいだった。三、四十メートルぐらいのトンネルを五分ぐらい見て回った。

七美はトンネルから出て、近くの森を探検することにした。美留久はさっさと歩いて行くので七美もついていった。

「ちょっと、ここどこよ」

七美は、森の中で迷ってしまった。

いつの間にか美留久がいなくなっている。七美は、あっちへ行ったりこっちへ行ったり歩き回った。

疲れてあきらめかけたころ、うす暗いトンネルを見つけた。吸いこまれるように、七美はトンネルの中に入っていった。真っ暗でとても静かだった。

「あれっ、このトンネルどこかで……」

ふらつきながら歩いていると、いつの間にか家の近くの道に立っていた。

「あっ、もとの世界だ。戻れたんだ」

七美は、家に入った。

次の日。

学校に行くとみんなが集まってきた。

「おはよう。ねえ、知ってる。今日転校生が来るんだって。女の子」

「へえ、そうなんだ」

七美は、ぼうっとして聞いていた。

「どうかした？ 七美、顔色悪いよ」

「う、うん。だいじょうぶ」

「そうそう、『運命のトンネル』って知ってる？ うわさだけどね、一匹の犬がトンネルに案内してくれるの。トンネルをぬけると、これからある出来事やこれから会う人なんかが見れるの。帰りも犬が案内するみたい」

七美は、どきっとした。

「そっか、帰りのトンネルは、行きのと一緒だから、何かひっかかったんだ」

「でね、このトンネルは、犬が選んだ人しか行けないから運命なんだって。一回行った人は、二度と行けなくて、一度きりの体験だってさ」

七美は、昨日の出来事を思い出した。

(じゃあ、これから何が起きるの?)

そう思っていると、先生が入ってきた。

「今日からこのクラスに入る宮野留奈さんです。仲良くしてあげてください」

七美は、思い出した。

「そっか。昨日のことは、これから留奈に会うことだったんだ」

休み時間、七美は留奈に話しかけた。

「はじめまして、留奈ちゃん。七美です」

「こんにちは。わたし、ドルフィンの国から来たの」

「でも、みんな信じてくれなくて……」

留奈は、悲しい顔で言った。

七美は、心の中で伝えた。

(信じるよ、ドルフィンの国。わたしは信じるから。あの時、留奈に会わなかったら帰ることができなかったかもしれない。留奈のおかげで前より勇気が持てた)

七美は、小声でささやいた。

「留奈、ありがとう」

それから塾の帰り道に犬を探したが、全然見つけれなかった。

「やっぱり、一度しか行けないのは、本当だったんだ。もう一度会いたいな。美留久に」★

次の日、七美は留奈に話しかけた。すぐに二人は仲良くなった。すると留奈は、

「今日、もし良かったらわたしの家に来ない？」

と七美を誘った。

「行く行く」

そう言って家に帰った七美は、留奈の家へ遊びに行った。

すると、留奈の部屋に一枚の写真が飾ってあった。

「あれ、これは？」

と七美は留奈に尋ねた。

「あのね、これは五年前に行方不明になった犬なの」

それを聞いた七美は、以前にトンネルの近くで出会った犬を思い出した。

「実は、わたしこの犬に似た犬を見たことあるかも」

「本当？ いるのかなあ」

「分からないよ。似ているだけかもしれないし……」

話はそこで終わり、二人は別れた。

次の日、七美と留奈は、美留久を探しに行った。

なかなか見つからずあきらめかけた時、美留久が現れてどこかに走り去ってしまった。でも、美留久は手紙を置いていった。

留奈、おれはさんざんこき使われた。  
このうらみはいつか返してやる。  
あと、これだけ忠告してやる。  
そちらから探してももう見つからない。

美留久

七美もこの手紙を見たから、留奈は七美に、美留久に何をしていたのか話さなければ

いけなくなった。

留奈は、五歳のときまでお嬢様だった。しかし、お父さんとお母さんが亡くなってしまった。お父さんとお母さんがいなくて、お金がなくなってしまったため、執事が次々とやめていった。最後に残ったのが、当時留奈の執事だった美留久だった。美留久はひとりぼっちの留奈をかわいそうに思い、留奈の世話をすることにした。美留久は大切に留奈を育てた。

二人になって三ヶ月が過ぎたクリスマスイブ。美留久がケーキを買ってきた。しかし留奈は生クリームが苦手だった。

「留奈、生クリームきらい。食べたくない」

と留奈は泣き出してしまった。美留久は困ってしまった。留奈は、魔法でケーキを他のお菓子に変えたくて、昔お母さんが使っていた『魔法の本』を取り出した。

美留久はびっくりした。留奈が魔法の本の中の呪文を唱えだしたからだ。

「グッドッグ〜」

すると、美留久が生後三ヶ月くらいの子犬になっていた。どうやら、ケーキにかけるはずの魔法が、誤って美留久にかかってしまったらしい。

「あれ、美留久？ もしかして犬になっちゃったの？」

美留久がすごくかわいい犬になっていたの、思わず留奈は、

「わんちゃんの方がかわいいね」

と言って、カメラを取り出して写真を何枚もとった。

でも、留奈は、えさや遊び道具を持っていなかったの、美留久と遊ぶことをしなかった。美留久が犬になった今、留奈はこの先どうやって生きていけばいいか分からなくなってしまった。そして、とうとう留奈は、美留久との写真を持って出ていった。美留久を置き去りにして。

「あんなに大切に育てたのに、犬にされた上に捨てられてしまったか……」

そこには、怒りに満ちた美留久がいた。

留奈の話を聞いた七美は、この話をどう受け止めればいいのか分からなくなって、そのまま家へ走って帰っていった。

学校に行っても、七美は留奈とはしゃべることができず、気まずい空気が漂った。

その次の日、学校に行ったら留奈が休みだった。友達のうわさによると行方不明らしい。七美ははっと気づいた。美留久の仕返しかもしれないと。

そのまま七美は学校を抜けだした。先生たちに止められながらも、そのままやみくもに走っていった。

息が切れると七美は我に返った。留奈がどこにいるのか、何の情報もなくただ走っているだけでは見つからないことにやっと気づき、学校に戻った。

その後、先生に一時間半ほど叱られ、友達に「なにやってるの」と不思議がられた。

家に帰ってランドセルを置き捨てると、真っ先に留奈の家を訪ねた。すると、留奈と美留久の写真たてが割られていた。そして、手紙が置かれていた。

七美とやら、留奈はもらった。ドルフィンの国にいる。助けなければ来い。  
まあ、どうやってくるか楽しみだな。  
せいぜいがんばりな。

美留久

七美はすぐに家に帰ってインターネットで『ドルフィンの国』を調べたが、何も無い。その後、近所の人に聞いても何も収穫はない。

日が暮れてきて帰ろうとしたとき、突然、七美の目の前に大きなトンネルが空いた。奥の方から声がする。

「ワッハッハッハー。やはり無理だったな。どうしても無理そうだから、ドルフィンの国に続くトンネルを空けてやった。来なければ来い」

七美は一瞬とまどった。だが、すぐさまトンネルの中へ入っていった。永遠に続くと思うくらい長いトンネルを、七美はただひたすら走り続けた。

トンネルを抜けた。

「あっ！」

走っていた七美は、勢い余って転んでしまった。

「いったーい。前のドルフィンの国とちがうじゃない。あれ？」

七美は思わず息をのんだ。目の前に苦しむ留奈がいる。慌てて駆け寄ってもすり抜けるばかり。すると、またどこからともなく声が聞こえてきた。

「ハハハ、それはある場所の画像だよ。ここまで来て確かめるがよい」

すると画像が消え、それと同時に地図が落ちてきた。

「進むしかない……」

七美は歩き出した。

七美は地図を見ながら進み出した。地図通りに行くと、途中で『海のトンネル』という看板を見た。

(ここに留奈がいるかもしれない)

七美はそう思った。足早に海のトンネルに向かうと、予想外だった。そこには留奈もいないし、トンネルはガラスが飛び散って、魚がピチピチ跳ね、水たまりができていた。

「な、なにこれ。これも美留久が……？」

七美はごくりとつばを飲んだ。それからまた地図通りに進んでいった。

『海のトンネル』を抜けると、森が道を包んでいた。

「これって……ドルフィンの国？」

七美はおそるおそる森に入ってみた。辺りは自分の歩く音しか聞こえないほど静かだった。生き物の気配もしない。また、足もとにはたくさんの植物が倒れていた。

「なんだか気味が悪い……」

森をもっと進んでいくと、だんだんと暗くなり、そして真っ暗になった。

「こわい……」

七美は走って走って、やっとのことで出口にたどり着いた。

出口を抜けると、そこは前に行ったドルフィンの国と同じ場所だった。

砂浜、たくさんの木、そして青い青い空が広がっていた。前と全く同じだ。森の「こ

わい」というイメージが吹き飛んだ。地図を見ると、ここで終わっていた。七美は（留奈はもうすぐだ）と思い、辺りを見回した。しかし、海には、船の他に何も無い。そして突然、木に巻きついていていた蔦が、いきなり七美の手と足に巻きついた。身動きができなくて七美は倒れてしまった。すると、船から黒い影が出てきた。

「よく来たな」

黒い影は、縄で縛られた留奈を引きずりながら出てきた。

そして、何も無い地面に留奈を置いた。七美は駆け寄ろうとした。すると黒い影が近づき、七美に向かって声をかけた。

「留奈は気絶しているだけさ。よく来たな。それだけはほめてやる。ここに来たということは、覚悟はできているな？」

「美留久なのね！」

七美はとっさに声をあげた。黒い影は、美留久だったのだ。

「待って！ 美留久の気持ちはよく分かる。だけど……、きっと留奈にも事情があったのよ！」

七美の言葉を聞いて、美留久は答えた。

「事情？ ハハハ、いつもそうだな。事情だの何だのって、そうやってごまかそうしているんだろ？ おれはもうだまされない。留奈の命を奪ってやる！」

これを聞いた七美は、すぐさま答えた。

「待って！ その前にわたしと戦って！ わたし……納得いかないわ。どうしてそんなことを言うの？ そんなことが言えるの？ 美留久だって、昔は……留奈のことが大好きだったでしょ。復讐のために、なんで殺そうとするの！ 必要ないじゃない！ だから、せめてわたしと戦って、美留久！」

七美は叫んだ。

「七美、そう焦るな。これからおれと留奈の命をかけた戦いを始めよう……」

美留久はそう言うと、縄でぐるぐる巻きにした留奈を小舟に乗せて、海へ流した。

「戦いの説明をする。よく聞いておけ。留奈の乗っている小舟には、小さい穴が空いている。おれを早く倒して助けないと、留奈は死ぬぞ。おれと戦わないで救おうとしても、小舟の中に入っている爆弾で、船ごとぶっ飛ばしてやる。では、戦いを始めるぞ」

「どうやって戦うの？」

「ドルフィンの国で最も迷いやすいドルフィン城と庭での迷路だ。迷路を抜け出た所に俺がいる。三十分くらいだ。俺はそこから逃げるから、俺を捕まえてはさみを奪い、留奈を助けるがよい。では、始めだ！」

戦いが始まった。

七美はドルフィン城の庭に入った。いきなり五つの分かれ道があった。七美が適当に進むと、分かれ道が増えていた。

「庭がこんなに広いなんて……」

七美の迷う様子と小舟が傾く様子を、城の屋上から見ていた美留久が、

「おれはここにいる。ヒントを見ながら早く来るんだな」

と叫んだ。

（えー、そんなあ。三十分でそこまで行くの？）

と七美は思った。でも留奈をどうしても助けると心に決めて、また進んだ。気のままに進んだ。まずは、まん中の右隣の道に進んだ。しかし、その道はすぐ行き止まりになっていたのので、引き返して一番右の道を進んだ。しばらくは進めたが、ずっとまっすぐの道で、また行き止まりになったのので、しかたなく戻った。なにか手がかりがあるはずだ。

（そうだ。美留久は「ヒントを見ながら」と言ったぞ。「見ながら」ということは、看板とかがあるはずだ）

七美は見回した。すると真っ白の看板があるじゃないか。よく見ると、  
『右から「白」』

と書かれていた。七美はさっぱり分からなかった。  
「そんなの『右から……』ってふるんだったら、数を書かなきゃ分からないじゃん」  
「んっ？ 数？ 数……。そうだ！ 画数だ。白の画数は、一、二、……五だ！ 右から五個目だから、一番左だ！」

しかし、その先を行っても行き止まりだった。七美は、  
「もういいや。道を関係なく進もう」

そう言うと、迷路を仕切る木々の中を通り、ドルフィン城に向かった。ドルフィン城に行く途中、木の枝が引っかかり、うでや足に傷がついた。ドルフィン城に着くと、庭を進んでいる時には気づかなかったが、ある物がポケットに入っていた。鍵だ。使い道はよく分からないが、大事にしまっておいた。

ドルフィン城。内部は外見とちがいで、少し道が小さく、しゃがんでやっと入れるくらいで、真っ暗だった。七美は左手につけた腕時計を見た。残り二十分だった。

「まだ少し時間に余裕があるけど急がないと。ここは迷いやすいって言っていたし……」

七美が近くにあった懐中電灯を持って進むと、看板があった。

『き→、た↓、び↑、わ←、は↓、ち↑、る↑。ヒント・→五十音』

と書いてある。

「これ知ってる。えっと、五十音表を見ると『き』の右隣は『い』、『た』の下は『ち』、『び』の上は『ば』……だから、『い・ち・ば・ん・ひ・だ・り』。分かった」

そう言うと、七美は一番左側の道を通った。次も分かれ道が広がっていた。

また看板が立っていた。

『JYUT。ヒント・キーボード』

と書いてあり、近くにキーボードの絵がくわしく書いてあった。

キーボードの『J』には『ま』と書いてある。同じように考えると、『Y』には『ん』、『U』には『な』、『T』には『か』と書いてあった。

「分かった！ 『ま・ん・な・か』だ」

七美はまん中を通り、次へと進んだ。次も分かれ道で、また看板が立っていた。

『み↑、わ←、た←、き↑、ヒント・→五十音』

と書いてあった。これは、さっきの五十音のヒントと同じだった。まん中を通ると小さな扉があった。

（この鍵を使うのかな？）

ポケットに入った鍵を取り出し、鍵穴に入れた。ドアが開いた。すると美留久が、

「取ってみろ」

と言って、ハサミを持って城内を走り出した。

「待てー」

七美は走った。全力で走った。しかし、美留久に追いつけない。美留久がバテ始めた。美留久の速度が落ちたが、七美は疲れてその場に倒れてしまった。時計を見ると、あと十五分。

(こんなところにいたら……、美留久が……行っちゃう)

少しでも美留久に追いつこうと七美は立ち上がり、歩き始めた。少し歩いたところに大きな実のなった木が立っていた。とてもいい香りがする。においに誘われ、七美は思わず手にとって口に入れる。

「おいしい！」

七美の体が熱くなってきた。

「これなら走れるわ！」

猛スピードで七美は走った。かなり速い。

「すごい……」

曲がり角を曲がると、遠くの方にバテた美留久がよろよろと走っている。七美は走ろうとした。そのとき、急に力がなくなっていくのが分かった。

「あ、どうしよう……。もうすぐなのに」

七美は最後の力を振り絞って走った。

ハサミにさわった。

その瞬間、ハサミから金色の光が出て、留奈のいる小舟の近くの陸に着いていた。

「七美、助けて！」

留奈は小舟の上に立っていた。足首くらいまで水がきている。時計を見た。あと二分。

「時間がない！ どうやってあそこまで行けばいいの？」

七美は、ハサミを置いて泳ぎ始めた。

「七美、この海は危ないよ。おぼれちゃうよ！」

七美は泳ぎ続けた。やっと小舟の所まで行ったと思ったら、あと三十秒。

「留奈！ そこから降りて！ ジャンプで。わたしが受け止めるから」

七美は無事に留奈を受け止め、陸にたどり着いた。あと十五秒。残りはハサミで縄を切るだけ。

チョッキン。

グルグル……と縄がほどけた。

留奈は助かった。あと五秒のところだった。時間になっても美留久は現れなかった。その代わりに、『運命のトンネル』の前に留奈と七美は立っていた。

「あれ？ これは……」

「戻れたんだ」

二人はいっせいに喜び合った。

そして、二人はそれぞれの家に帰った。

次の日、学校に行くと留奈がみんなに囲まれていた。

「どこにいったの？」

「大丈夫だった？」

などと聞かれていた。

留奈が笑顔で、

「大丈夫だよ」

と答えると、みんなは安心したようだった。

チャイムが鳴り、先生が教室に入ってきた。男の子が一緒だ。なにか見覚えのある子だ。

「今日から来た、美留久君だ」

と先生が紹介した。七美ははっとした。

「美留久といいます。仲良くしてください」

同じ声だ。七美と留奈は顔を見合わせた。

「こら、留奈、七美。聞いているのか！」

あなたも、もし運命のトンネルを見つけたら、くぐってみてください。運命のトンネルはあなたを待っています。